

# 安倍元首相も苦しんだ潰瘍性大腸炎

## 50歳以降の発症増、がんリスクも

今回は、国の「指定難病」である潰瘍性大腸炎を取り上げます。

潰瘍性大腸炎は、安倍晋三元首相が罹患（りかん）していたことで有名になりましたが、陸上男子100メートルの元日本記録保持者、桐生祥秀選手らも経験したことのある病気です。

この疾患は世界的に増加しています。日本でも1970年代以降右肩上がりで、現在患者数は10万人当たり170人ほどです。

もともと潰瘍性大腸炎の発症は20代が一番多く、若い人の病気と考えられていました。

しかし、最近50歳以降に発症する人が増えています。50歳以降の発症者には既喫煙者（喫煙経験者）が多く、予後が悪い傾向があります。

一方で近年、潰瘍性大腸炎に対して、さまざまな薬が開発され、QOL（生活の質）も予後も改善傾向です。

大腸は盲腸から直腸までの全長1・6メートルの腸管で、水分を吸収し、便を形作ります。大腸には多くの腸内細菌が存在し、感染防御にも重要です。このため大腸を含め腸には全身の半数以上の免疫細胞が集まっています（腸管免疫）。

これら免疫細胞が大腸の一番内側の粘膜で過剰な反応を起こし、びまん性の炎症を生じた疾患が潰瘍性大腸炎です。

57歳男性のAさんは、2年前から1日5～10回の下痢が時々あります。近くの医院で治療を受け改善しますが、年2～3回繰り返します。この春、生活が変わり症状が悪化、1日10回以上の下痢が続きます。便の中に粘液と血が混じり（粘血便）、体重減少や倦怠（けんたい）感も強く、炎症反応も上がりました。大腸内視鏡検査を受けると、直腸から左側の大腸の粘膜がただれ、出血しやすくなっています。内視鏡などの検査結果から、潰瘍性大腸炎と診断され、入院して

ステロイド治療が始まりました。

潰瘍性大腸炎の原因は不明です。その発症には遺伝子変異や腸内細菌叢（そう、腸内フローラ）の変化も関係しますが、食生活や生活習慣の乱れ、ストレスも影響します。

潰瘍性大腸炎で多い症状は、腹痛と頻回の下痢、粘血便です。軽症の人は内服薬や座薬で治療します。ただ、炎症が大腸全体に広がり（全大腸炎型）重症化すると、命に関わります。時に救命のため緊急で大腸を全部摘出することもあります。

最近では、炎症や免疫反応、炎症の元である白血球の活性化などを抑える薬が開発され、緊急手術や命に関わる状況は減りました。こうした治療は効果が高い半面、医療費も高くなります。幸い指定難病なので自己負担分の一部は助成されます。

## ■ 長引く闘病生活

潰瘍性大腸炎は、治療で良くなったり一時的に悪くなったりしながら10年ほどで、半分ほどの人が寛解（かんかい、症状がほぼ消失した状態）し、症状が続く人は3割程度になります。

このように潰瘍性大腸炎では治療が長くなります。炎症の経過が長引くと注意が必要なのは大腸がんです。診断後10～20年で大腸がんリスクが5～10%ほどになるといわれています。炎症が大腸全体に広がっているほど、がんのリスクは高くなります。

また高齢発症の潰瘍性大腸炎では、診断後1年経るごとに少しずつ確実に大腸がんのリスクが上がります。

潰瘍性大腸炎にはならないのが一番ですが、なった場合、経過の長い人や高齢者は、年1回大腸がん検診を受けましょう。